

---

# 守護人たちへ

桜井 鈴華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守護人たちへ

### 【Nコード】

N5843W

### 【作者名】

桜井 鈴華

### 【あらすじ】

日本で暮らしているある兄弟と妹が

異世界にきて世界の守護神として生活するお話です。

最初は悩んだり失敗をしたり喧嘩をしてその中で多くの出会い、別れを経験し人との繋がりを実感していきます。

精神的にも肉体的にもだんだんと成長していった先に兄弟と妹はどのような未来を選択するのかを描けたらと思います。

## 第一話「日常」がなくなる時（前書き）

気にしすぎかもしれませんが、文章中にパロディな文章が少し出ていたりします。

## 第一話「日常」がなくなる時

俺は良く同じ夢を観る。

何度も何度も。

そこはモノクロの世界。

美しい女と子どもが花畑に居る。

子どもがはしゃいでいる。

女が笑う。

子どもが笑う。

ふと目に入る木の上の林檎。

子どもがあれば欲しいと駄々をこねる。

女は困ったような笑顔で羽を使い林檎を？ぐ。

ふと少年が空を見上げる。

鳥が近づいているのに気が付く。

よく見るとあれは鳥であって鳥ではない。

世界はモノクロなのにその鳥だけに色がついている。

鳥が子どもめがけて飛んでいく。

このままではぶつかるとは思わないかと思う。

いや、ぶつけようとしているようだ。

女がものすごい速さで子どもの前に庇つように子どもを抱える。

女の体から血が飛び散る。

女が倒れ。

それでも笑顔で。

子どもが泣き叫ぶ。

「ごめんなさい、ごめんなさい……僕……僕……」

まったく俺とは関係ないはずなのに、心が震えて。

なぜだかいつも息が詰まる……。

なぜだか心に刻まれる想い。

我が儘を言っではいけない。

大切な人を守るために。

あのようにはなつて欲しくない。

「どうか……どうか！目を開けてください！……さま！」

「うああああアアアアアア！！！！！」

.....

けたたましくなる目覚まし時計の音。

「っ……またあの夢か」

朝6時、布団から起き上がる。

世の学生人、社会人が起きる時間としては少し早いだろう。

俺が20歳までは祖父である銀郎じいさんに衣食住の世話をし

てもらっていたが

祖父が亡くなり、可愛い弟と妹の為に辰巳<sup>たつみ</sup>家長男として

家族の家事担当をそれから続けている。

最初は戸惑ったけど意外と出来るもんだな。

身支度をして慣れた手つきで朝食、弁当を用意、その後洗濯物を

干している

弟が起きてきた。

「はよー、兄貴」

「おはよー勇次」

「……おいおいなんだよそのエプロン……」

兄貴、やってもらっておいでなんだけど段々おかんみたいになり

つつあるな……」

「……ほっといて」

こいつは俺の弟。

コックを目指しており、現在調理師専門学校で勉強中。

「あー勇次悪いんだけどさ、有希起こしてやってよ」

「はぁ……めんどくせーなー」

有希とは俺の妹。

現在女子高生で17歳。

最近、彼氏が出来たらしく家に帰ってくるのも遅い。

そのせいで寝不足気味らしくて、朝なかなか起きてこないんだよ。

はぁ……有希のお付き合いには文句を言いたくないけど、寝不足

はやめてほしいよ。

「もう……！……ノックしてってば！」

「いちいちうるせーな……早く起きろよ！」

ほらまた始まった。

兄弟仲がいいはずなんだけど、喧嘩も多い。

洗濯物を干し終わったので

仲良く喧嘩しながら2階の有希の部屋から降りていく2人に近寄

り声をかける。

「はいはい、朝ごはん食べないと間に合わないよー」

「もー、信兄ももう少し早く起こしてよね！」

「寝坊したのは有希だろが！」

「勇兄はうるさいな！」

「まあまあ、有希ごめんな？とりあえず早く食べて」

俺がいつもの様に有希の頭をなでながらなだめる。

有希は顔を真っ赤にしてぶつぶつ言っている。

ついつい子ども扱いしてしまった、俺の悪い癖だ。

この歳の女の子は子ども扱いするとキレたりするから。

「「いつてきまーす!」」

「はいよー!いつてらっしやーい!」

これが俺の日常。

俺はどうするんだって?

俺は体育大学を卒業し現在教育職員免許の勉強中。

ご飯をどんぶり飯をかつ込むように食べて済ませた後、片付けをして自分の部屋に向かう。

勉強に取り掛かろうとした時にふと家族の写真に目が行った。

俺と勇次、有希、銀じいでとった最後の写真だ。

銀じい天国でも元気にやっているかな……。

ぼんやり考えながら自分の首にかかっているクリスタルのペンダントをいじる。

このペンダントは銀じいに大学合格のプレゼントとしてもらったものだ。

少し荒目の銀の鎖のネックレスで普段の銀じいの服装からするとそぐわない位センスがいい。

銀じいは大切な知人からのプレゼントだったと聞いていたけどな。そんな大切なものをもらえないと怒るとさびしそうな顔で

「そのペンダントは使われていた方が幸せじゃよ」

と言っていたので、ありがたくもらうことにした。

ぼんやりと考えながらも勉強に意識を集中する。

2時間ぐらい経ったかな。

おもむろに時計を見ながら一人つぶやく。

「そろそろ休憩にしよう」

台所に向かいポットから湯を注ぎ紅茶を入れる。

紅茶を飲みながらの休憩時間。

至福のひと時だなあ……。

本を開く。

俺の趣味のひとつである読書で精神的な疲れを癒す。

最近読んでる本は「シャルロット・ホルドの事件簿」

第5短編集となっており、お嬢様探偵であるシャルロットが助手のワトルトと共に

数多くの難問を乗り越え、爽快に事件を解決していくミステリー小説で結構お気に入り。

シャルロットが犯人を突き止め、真相に近づいたさなか迫りくる危険に立ち向かうが

抵抗空しく、犯人に捕らえられてしまった。

そこまで読み終わったところで急に眠気が襲い、俺の意識は遠のいていった。

- - - - -

白い雲と見渡す限りの闇に包まれ、自分が寝てしまった事を悟った。

「久しぶりじゃな、元気にしておったか？」

「?! 銀じい……なのか？」

見間違えるはずもない。

伊達に20年の付き合いではない。

そこにはグレイスヘヤーでキリリとした眉、歳の感じさせない真っ直ぐとした背中に、長年剣道をやっているせいか一瞬も隙がない気配を身に纏った俺たち兄弟の育ての親である「辰巳 銀郎」が居た。

「これは俺の作りだした幻想空間じゃ、精神体である俺の話聞いてもらうために信也には眠ってもらった」

「じいさんその……死んだのは2年前だし四十九日はとっくに終わってるはずだから天国にとっくに行ってるかと思っただけ……」



「それはともかく、どんな形であつても会えて嬉しいよ……銀じい  
銀じいは嬉しかったのか照れたような、困つたような顔を浮かべ  
ている。」

「ウオツホン、なんだなんだ長男の癖に女々しいのう。まあしかし  
嬉しい事を言ってくれるもんじやの」

「積もる話も沢山あるけど……何か今日は訳が有つてこうして会い  
に来てくれたのか？」

「おつとそうじゃった、儂がここに現れたのは実はお前たちにずつ  
と内緒にしていたことを話そうと思つてじゃな……」

「内緒？」

「そうじゃ、まずは儂の事から話さなければならぬ」

「ああ」

「先ほど、温かい歓迎をしてくれた後でその……いいづらい事なん  
じゃが」

「？」

「実は……儂は死んでないじゃよ……」

「え……それはどういう……」

「言葉通りじゃ」

「……」

「驚いて言葉も出ないようじゃな、話を続けるぞ」

「驚いて言葉も出ない俺に落ち着かせるように銀じいはゆっくりと  
順を追つて説明してくれた。」

要訳すると

・銀じいは実は人間ではなく精神族と呼ばれる者でそもそも地球人  
ではない事。

・俺たち兄弟も地球人ではなくパラレルワールド……つまり異世界  
に住んでいる者という事。

・俺たちの父さんと母さんは守護人と呼ばれる存在で異世界を守る

役割を持つ事。

・ 守護人はその立場ゆえに、赤子を異世界で育てるとなると命を狙われる危険もあったため  
代々赤子は環境の良い国の地球で育てる決まりになっている為ここで育てられた事。

・ 銀じいは俺の父親の元専属御使いであり、子を育てる教育係としての任務を全うすべくこの地球に赤子を3人も抱えながら来た事。

等を異世界や種族に違い等についての説明を織り交ぜながら教えてくれた。

「……………」

「相当混乱してるようじゃが話を続けるぞ」

「なぜ今このような話をするかというんじゃな、お前さん達両親と今までは2年ごとに連絡を取ってたんじゃが今回連絡をしようとした所どうも連絡が途絶えてしまったの」

「父さんと母さんからのか?!」

「そうじゃ」

「そこで、俺からのお願いがあつての…………、お前たち3人で異世界に赴き父様母様の様子を探ってきてほしいんじゃ」

「お前たちはしきたりとして16〜25歳の間に修行を積み一人前の守護人にならなくてはならない」

「以前は父様母様の意向で地球人としての暮らしを続けていてほしかったんじゃが……………」

「最悪、現在の異世界において守護人がなんらかの影響で役割が出来ていない可能性もありうる」

「俺はお前たちが地球に戻ることも可能なように、またその間の時間を場合によっては凍結維持をしなくてはならない」

「準備などもあるじゃやて、一週間の猶予をやるぞ」

「この任務は命に係わる可能性が高い。最悪異世界から地球に戻れないという可能性もある…………その間にお前たちはどうしたいか決め

てほしいのじゃよ」

「え……はあ……うーん……」

正直、色んな情報が詰め込まれすぎて処理しきれない事の方が多い。

そもそも、自分たちがまさか地球人ではないという発想も思春期の男でもない限り生まれないだろうな……。

整理したいのと、自分の中でなかった事にしたいというのが本音だけだな。

しかし、銀じいがいるのは間違いがないと言い切れる。

とりあえず、あいつらに相談するべきなんだろう……。

色々と考えていたのが顔に出ていたのか今度は少し悲しそうな顔をして

「じゃあ、言いたいことは伝えたから詳しい事はお前の机の上に巻物を置いておくぞ」

「また……な、銀じい」

「あいわかった」

そして意識が遠のいていく……。

これは俺たちの日常がなくなっていくた始まり。

## 第一話「日常」がなくなる時（後書き）

二か月ほどかけて考えた設定をやっと活用する時が来ました。

カッコいい男の人とかをどうしても出したいと思っっているので登場人物が多い割に

男率が高いかもしれません。

それでも修正は何度かやっているんですが、いかんせん文章能力が低いので文章がおかしいところがありましたらご指摘いただけると嬉しいです。

もちろん、感想もお待ちしてますー！！

## 第二話 長男の気持ち（前書き）

あ、毎度見てくださっている方はお気づきかもしれませんが表現がおかしいなって思う所はちょこちょこ変えてしまっています。

## 第二話 長男の気持ち

その日の夜の事。

「集まってもらつてごめんな……」

「兄貴、気にすんなつて」

「せっかく恵美と約束してたのにー！早くお風呂にも入りたいし……あいたつ」

俺が注意するよりも先に勇次が有希に叱っていた。

「いちいちうるせえんだよ！とつとと座れよ！」

「あ、あはは……まあまあ」

集まるまで一悶着あつたけど、俺の必死の説得が聞いたのか勇次、有希に何とか集まってもらつことが出来た。

そこで銀じいにもらつた（あの後目が覚めたら机の上に置いてあつた）巻物を広げて

2人にかいつまんで説明する。

2人とも予想通りあまりいい顔はしてくれなかった。

「銀じいの気持ちも分からないではないけど……俺は夢をあきらめるわけにいかないだよ！」

「私だつて……やりたい事とかいっぱいあるし……！」

「……うん……俺だつてバイト念のため辞めておかないといけない

……銀じいは時間を止めておくとは言つてくれたけど教員試験もあるしな……」

皆地球での生活が当たり前すぎてそんな事考えられないといった感じだった。

過去や先祖がどうあれ俺達は今を生きている。

俺は体育の教師、勇次はコックになりたい。

有希だつて彼氏が出来たばかりみたいだし。

「みんなの意見は分かつた」

「俺も思っていたことだし、もちろん……母さんや父さんが死んだわけじゃないと聞いてうれしかったし、連絡が出来ないっていうことはもしかしたらっていう気持ちで気にならないのは嘘なんだけど……」

「兄貴……」

「信兄……」

「その……異世界に行ったとして、万が一こっちに戻れなかったとしたら悔やみきれない。勿論、お前たちが行ってもいいって気持ちなら考えたんだけど……行きたいって気持ちもあるけど、周りの人の事を考えると……考えられないっていうか」

「なんだか、言い訳じみてカッコが悪い。」

「でも、家族に嘘言ってもしかたないしな。」

「とりあえず、一週間皆で考えて……今のところは銀じいには悪いけど断ろうという話になり」

「お開きとなった。」

-----

次の日の朝

いつもの様に朝ごはんを作り、テーブルに並べる

お弁当も作った。

洗濯物を干している最中に勇次から声がかけられる、心なしか元気がなさそうだな。

「兄貴、はよ」

「おう、おはよー」

「勇次悪いけどいつもの様にと……あはは……有希おはよ」

「おはよーあつ寝坊してると思っただんでしょ……信兄ひどいなあ」

「お前がいつも寝坊してるからだろが」

「勇兄はだまって！」

いつもの様に有希を起こしてもらおうとしたら後ろからパタパタ

と階段を下りる音がして有希が不機嫌そうに挨拶を交わす。

有希には悪いけど、勇次の言っている事が正しいなあと思った。いつもの様に兄弟を学校に送り、カレンダーを見る。

明日はどうやらバイトの日だ。

銀じいが亡くなった後一年は銀じいの遺産を崩したりして何とかしていたが

後々どうなるかわからないので自分たちで決めてそのお金で暮らしていこうと決めていた。

勿論銀じいの遺産はたくさんあるし、自分たちで稼がなくても後20年は暮らしていけると思う。

それでも甘えてはいけないと思っていた。

これからは自分たちで生きていけないうけないと感じていた。

まわりの大人は甘えてくれ、頼ってくれと言ってくれた。

嬉しかったけど。

俺は昔から”お金の切れ目は縁の切れ目”という事を知っていた。

銀じいは昔から剣道が得意で剣道会の有数の人物であった。

剣道は3段から人に教える事の出来る権限を持つが

銀じいは7段であった。

他の銀じいの弟子に聞いた話だと2段までならそれなりの腕があれば学生でもとれるらしい。

しかし7段となると日々の努力は勿論の事、永延と繰り返される吐くような訓練。

それに耐えうる精神、体力を持つ人格者ではないと到底出来ないのだそうだ。

その銀じいは昔は道場を開き多くの弟子を持っていたが

ある弟子が金関係で膨大な借金を追ってしまい、逃げるように辞め

弟子からお金を吸い取れないと知ったチンピラどもが道場に押し寄せ多くの弟子がけがをする大惨事になったらしい。

幸いにも再起不能な弟子は出なかったようだが、そんな事があつ



てやむおえず道場をたたまないと行けなくなり、週に何度か学校の運動場を借りて教える程度しか出来なくなつたんだそうだ。

それ以降、辞めた弟子とは疎縁となり、他の弟子もあいつとは会いたくないといっているそうだ。

その話を聞いて幼心にも悲しみを覚え

お金の怖さを実感した。

それ以来、お金に関してはたとえ兄弟や友達にも厳しく接してきたし、兄弟も俺を見てお金に対する考えは厳しくなつたように思う。

高校生になつて自分でバイトをやつてお金を稼ぐことが出来るのが嬉しかった。

銀じいは俺たちがお金の事が厳しい理由は何となくわかつていたらしくて

小さい頃は良く「今お金が稼げないお前たちは色々な事を学ぶのが仕事で、俺はそれに対する報酬をやっているだけじゃ」

と言つてくれていた。

以前はそれでも納得がいかず、甘えてくれない俺に対して「意地っ張りじゃ！」と軽く怒られてしまう程だつたけど。

高校生になつてバイトを始めてからは俺も子どもなりの割り切りが出来るようになって

自然と銀じいに甘える事が出来るようになった。

バイトも色んな事を経験したくてそれこそ新聞配達のバイトからファミレス、清掃、テレアポなど等

数えきれないくらい経験した。

おかげで大学生になつてからは良く落ち着いてるとか頼りがいがあるとか言つて

男の後輩に頼られたり、友人からは相談に乗ることも多かつた。

なぜか友人の彼女の尻拭いもしたりした。

当然、女の嫌な部分とかも見る羽目になつて行為を持たれたりすると無意識にさけたりめんどくさいと思う様になつてしまった。

話が逸れた。

明日は本屋のバイトの様だけど、正直今日の段階で2択迷っており携帯をいじっている状態だ。

1つは一旦バイトに向かい、バイトの先輩に相談してみる。

もう1つは今日の段階でバイトの先輩に相談し、そのまま場合によつては辞める手続きを行うだ。

「うーん……どうするかなあ」

今のバイトの先輩は「荒木 僧史郎」という名前で俺の5歳年上。2年前に当時勤めていた会社でリストラに遭い、泣く泣くこの本屋の社員として就職した経歴の持ち主である。

正社員なのに偉ぶるところがなく、面倒見がいい人で店長からも信頼されている。

そして、俺とは気が合うらしく良く飲みに行ったり俺の兄弟の世話もしてくれたりと家族ぐるみでお世話になっている人だ。

たしか今日は先輩も休みだったよなあ……。

正社員と言えどもサービスマスの会社は誰もがシフト制の会社が多く休みが平日の場合が多い。

先輩もそれは入った時からわかっていたそうだが、なかなか同級生と休みが合わず寂しいらしい。

なので俺が飲みやら遊びに誘うと大抵が暇で嬉しそうに付き合ってくれるのだ。

俺は先輩が迷惑ならないよう時間を調整し、電話を掛けた。

「おー……おはよー……」

眠そうな先輩の声。

「……あ、おはようございます。すみません起こしちゃいましたか？」

「あーいやいや、ちょうど起きようと思った所だったから」

「あはは、それなら良かった、先輩って今日空いていますか？」

「おうよー！どっか遊びに行くかい？！」

「あー……えつと遊びも捨てがたいんですけど、ちょっと相談したい事があった」

「……ん？なんか悩みかい？相談にのるよ？」

「いつもありがとうございます！えつと、ゆっくり話したいので家に呼びたいんですけど……」

「おーいいよーじゃあなんかつまむもの買ってそっち行くよ」

「分かりました、では1時間後にお待ちしてます、よろしくお願いします」

電話をゆっくり切る。

先輩に失礼にならないよう簡単に掃除が終わった頃チャイムが鳴った。

「おー、来てくれてありがとうございます」

「いいつて、俺とお前の仲じゃないか！気にするなよー」

いつもの人懐こい笑顔をみてほっとする。

なんでこんなに人が好くて仕事の出来る人をリストラなんかしたんだろう。

その会社の社長を殴ってやりたいくらいだ。

ぼんやり考えながらテーブルに案内する。

先輩の持ってきてくれたクッキーとそれに合わせた紅茶を注ぎ向き合う形で座った。

「それで話って？」

先輩に銀じいの昨日聞いた話をこと細かく話す。

最初は流石にビックリした様子で聞いていたが俺の真剣な様子に冗談ではないと感じたんだろう。

最終的にはこれまでにないくらい真剣に話を聞いてくれた。

聞き終わった後、先輩はしばらく悩んで意を決したように口を開いた。

「……で信也はどうしたい」

「……それを決めかねてるから相談したんですよ……自分で頭いっぱい……」

「俺は信也はどうしたいか聞いたんだよ」

「っだから……！」

先輩の顔を見てはっとした。

先輩が泣いている、多分先輩自身気が付いていないのだろう目を真っ直ぐ俺に向けて目じりからまるでぼたぼたと水が落ちている様だった。

「俺は正直信也と知り合ってそんなに立っていないし、俺がどうこう言う筋合いは無いのかもしれない。けどな知り合った当初から信也は誰かに頼るのが苦手だったよな」

「それは……」

「んー頼るのが苦手とは違うのかもな、お前は優しすぎるんだよ」

「そんなことな……」

「いやいや……最初は大人の付き合いで割り切ってそういう風に接してるのかと思ってたんだよ」

「だけど、兄弟に接しているお前も同じ態度で接しているのも見て誰にでも同じ様な態度のお前を俺がひっぱってやらないと思うってさ、でも知らず知らず俺もお前に頼ってたのかもしれない……」

先輩の言葉を聞いて俺も泣いている事に気が付く。

「もう1度聞く、お前は どうしたい？」

「俺は……っ俺は本当はここじゃなくて向こうに行ってみたい……です。向こうで父さん、母さんに会ってみたいし、たとえ会えなくてもどうい生活をしていたとかどんな気持ちだったかとか感じたい」

「ずっと苦しかったんですよ、まわりが当たり前前に両親が居て俺達も銀じいは居たけど、父さん、母さんってのが居なくて……今の知り合いともう会えなくなるかもしれないと思うと辛いです……でも自分の両親と会えなくなるかもしれないと思うと一生後悔すると思うんです。先輩から見たら俺の意見って冷たいと思うかもしれないけど……っ涙とまんねえ……」

「うっん、優しい先輩のお前だからこそきつとそういう選択をする

「思ったよ」

「むしろ、違う選択をしてたら殴ってたかもしれないなーあはは……まあ……もしかしたら会えなくなるかも知れないけど、また会えるかもしれないんだろ？そうしたら色々聞かしてよ、な？」

胸が苦しい……先輩は俺の話しぶりから本当は行きたがっているのを見抜いていたのかもしれない。

頭をがっしがしなでられた。

その後家にあつた人生ゲームをしながら沢山話をした。ずっと先輩は笑顔で明るく話をしてくれた。

途中で勇次と有希が帰ってきて人生ゲームをやり直し遅くなったと言って夕飯はあるもので先輩が作ってくれた。

結局料理はそんなに得意じゃないからと照れ臭そうに笑い鍋を食べてお開きになった。

先輩は明日出勤で俺の事は店長に話を付けて辞めさせてくれるって悲しそうに笑ってくれた。

明日から他の人にも連絡しないと。

その前に弟と妹にも説得しないと……。

俺の胸には少しの悲しさとそれ以上の嬉しい気持ちで溢れていた。

## 第二話 長男の気持ち（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

しばらくは辰巳兄弟たちの葛藤を書こうと思っております。

それと異世界に兄弟が行こうとする動機をうまく表現できたらいいなと思っております。

今は主人公視点で物語が進んでますが、度々次男と長女に視点が変わる場合があります。

## 第二・五話 私の場合（前書き）

割とサバサバした性格の妹有希視点です。

主人公と時間枠が被るので、面倒な人は飛ばしてください。

## 第二・五話 私の場合

いつもの様な毎日。

尊敬する兄が2人居て死んじゃったけど大好きだった銀じいちゃんも居て

大好きな友達と大好きな彼氏と……。

幸せだった。

そんな私のささやかで他の人から見たら贅沢すぎる幸せを潰される日が来るなんて思いもよらなかった。

-----

普段は口が悪くていつもぶっきらぼうだけど、頼りがいがあった私がつらい時にははつとするアドバイスをくれる勇兄と、いつも笑顔でとつても優しく大人顔負けのしつかり者で運動神経も抜群の信兄。

妹の私が言うのもあれだけど、二人ともかつこよくて私が妹じゃなかったら惚れてたくらい。

勿論、友達にもいった事ないし絶対に誰かにその事を口に出した事は無い。

そんな事言った日には勇兄は調子乗るし、信兄には何かあったんじゃないかって心配されるに決まってる。

何より恥ずかしい。

朝ご飯とかお弁当はいつも信兄のお手製。

コック目指してるんだから勇兄がすればいいじゃんって言ったなら「勇次はその分勉強してほしいからさー」

って笑いながら言う信兄と

「自分の作った弁当より兄貴に作ってくれた方が嬉しいんだよっ」  
って照れくさそうに言う勇兄の声が被って笑っちゃった。

-----



いつもものに友達の恵美と亜紀に挨拶をして、3人一緒に学校に向かう。

恵美は私が小学生の時から友達の元々銀じいの弟子の子どもだったから幼馴染みたいなもの。

最初は人見知りが激しくて中々友達になつてくれなかつたけど。

小学校入ったばかりの頃から信兄と勇兄は人気で、一番下で妹だった私が一番話しやすかつたんだろう。

良く上級生の男女関わらず言付けやら手紙やらプレゼントをお願いされて。

大変だったなー今はそれぞれ違う学校って言う事もあるし、それなりにあしらい方も兄たちは分かつてきたみたいだけど。

当時は兄たちも分かつてなかつたし、私も断り方が上手くなかつたから一方的に渡されて。

結構恨まれたり兄たち妹ってだけでお近づきになろうとする人もいたけど、恵美が結構庇ってくれたりしたので言葉に表せない位感謝してる。

原因はこんな事考えたくないけど、兄たちからというのは思つて。

でも兄たちはただ生活をしているだけだ、生活をするために勉強をして、勉強をするために学校に来ている。

それは皆と変わらないはずなのに、どうして心穏やかに生活をさせてくれないんだろう。

当時は良くそついう風に考えて心がささくれだらけになつたりしたけど。

それを抜けられてうまく過ごせる様になつたのは彼女のおかげもあると思う。

亜紀は知り合ったのは中学3年からだったんだけど

損得無しの付き合いと言うかさばさばして話しやすく面白

子。

自然と私も恵美も仲良くなつて、気がついたら3人で遊んでばかりなんだ。

「にしてもさーお兄ちゃんっ子のあんたが彼氏とはねー」

ここ最近出来た彼氏の漢太の事をからかってくる。恥ずかしくてなんだかくすぐつたいけど悪い気はしない、なんとなく勇兄と同じようにずけずけとものを言う所は勘違いされやすいけど優しさが見え隠れしていて私は大好き。

「本当にねー、私もその恩恵にあずかっていい男の1人は2人……」

私の好みはねー優しくてかっこよくてー金持ちよ！」と夢見がちに冗談きついしやれをさらつと口にする亜紀。

「もー何いってんのー恵美もひどいけどお……亜紀は2人つて……しかも金持ちつて……」

「……あははは！」「」「」

3人で笑い合う、多分男の子が居たら真っ青になつちゃうくらいの冗談。

女の子同志だから出来る話題だよな。

「やつほー、お嬢様方〜俺とお茶しない〜」

そんな周りから見ると良くわからない微妙な空気をぶつた切つてくれた男の子。

少しくせつ毛で色素が薄目の優しい笑顔がそこにあった。

「あー有希の王子様のお出ましょ〜」

「噂をすれば何とやらつてね！」

もう何度目か分からない二人のからかい。

「おっと俺の噂か〜！いやーまいったな、しかし俺には有希姫といっ……」

「あーもう！漢太も乗らなくていいから！！行くよ！！」

漢太はノリノリで話してたけど、もう恥ずかしくて聞いてられな  
いったら！

「……はいはい、ご馳走様！またねー」「」

「おーみんなまたなー？」

と、私に引つ張られながら何も感じていないように手を振り別れる彼氏と友達

友達公認ってありがたいけど疲れる……。

この男の子は私の彼氏の「大泉 漢太」

元々は勇兄の後輩で私の先輩。

勇兄とは物凄い仲良く、勇兄の口の悪さをのらりくらりとかわしボケるすごい人。

空気読むのがうまいんだと思う。

多分、あの毒舌勇兄がクラスメイトに”可愛い勇次”で済まされてるのっていつも漢太が隣に居てつかめない会話にぐったりしているおかげもあると思うんだよね……。

-----

放課後、水泳部の活動が有り部活動を済ませた後、部室に行くとき部長の「蒼凧 千昌」さんと出会う。

「お疲れー」

「あ、お疲れ様です千昌部長」

今からプールに入るんだろうか。

白く透き通るような肌に瞳の奥がキラキラと瞬く

キリリと凜々しい眉に少しきつめの目の形が女性らしさとは別の

カッコいい男の子を連想させる。

大会にも良く出場していて、今年期待の選手と取材も来るほど。

一部のファンからは水泳界の男装の麗人とまで言われているみたい。

い。

「もー堅いー千昌で良いって言ったじゃんー敬語も使ってるしー……

……

「あ……うーんでも一応部長じゃないですか……」

「一応って何よー一応って！」

「あすいませ……」

「あつはは！冗談よ、最近有希ちゃん頑張ってるね？」

「ほんとですか？！ありがとうございます！」

「うんうん、いいいいこ、明日も頑張ろうね」

「はいっお疲れ様ですっ」

「やっばい、かっこいいな……女なのに。しかもちよつと性格変だ  
けどイケメンなのっ」

「惜しむべきは女性だった事よね。」

「ぼんやり考えながら更衣室で手早く着替える。」

「最初は恥ずかしいーとか考えてたけど着替えに慣れてくると何で  
もない。」

「競泳水着が濡れてピチピチした部分を手早くタオルで拭いて」

「上からそのままスカートとブラジャーをつける。」

「ブラジャーの下から上の肩掛けの部分を外し胸が見えないように  
下におろす。」

「そのままキャミとブラウスを着てボタン着けて上着完了。」

「下ろした水着をスカートの上から外してパンツ履いて靴下を履け  
ば下も完了ーっ」と。

「1分もかからず手早く着替える。」

「髪の毛は濡れたポニーテールのままで肩にタオルかけて乾かしな  
がら漢太との待ち合わせ場所に向かう。」

「いきなりチョップされた、ん？なんか漢太が珍しく怒ってる。」

「有希ちゃん！ちゃんと髪の毛乾かしてからきなつて！風邪引いた  
らどうすんのー！それと、また携帯確認してなかったでしょ……勇  
次お兄さんと恵美ちゃんから有希ちゃんから連絡来ないって電話来  
たよ！ちゃんと今直ぐ連絡しとけよー？」

「はい……ごめんなさい」

「わしゃわしゃと自分の髪を乾かしながらまずは勇兄に連絡。最初  
に聞いた言葉が」

「っおっせえんだよ！何回電話したと思ってんだ！」

「悪いのはこっただけだよー、言い方ってもんがあるでしょーまあ」

勇兄らしいけど。

「水泳部だったの！それで何ー？」

「あー、それは悪かった。えーっと兄貴から大事な話があるんだってよ。」

「ふーん、信兄から？なんか珍しいね？」

「俺もわかんねえ、夜6時に居間に集合な？じゃあ伝えたから」  
言うだけ言ってブチっと電話が切れる。

まあ、謝ってくれたしいいか。

恵美からの連絡はメールにも入っていて5時からカラオケのお誘いだった。

確実に信兄との話と被りそうだったのでメールで断っておいた。  
私が一通り連絡し終わったのを見計らって横から漢太が間に合わないといけなから早く帰ろうと言ってくれた。

うーん漢太は出来る彼氏だな！とニヤニヤしながら思ったのはないしよ。

-----

その日の夜の事。

「集まってもらってごめんな……」

「兄貴、気にすんなって」

「せっかく恵美と約束してたのにー！早くお風呂にも入りたいし……あいたっ」

きつと明るい話だと思ってたのに……重い空気が耐え切れなくて思わず軽口を叩く。

「いちいちうるせえんだよ！とっとと座れよ！」

重い空気を読んだのだろうか。勇兄がいつも以上にイライラしてた。

「あ、あはは……まあまあ」

私もついつい勇兄の態度にイライラしてしまい、危うく喧嘩になる所だったけど信兄の必死の説得によりお互いのイライラが収まる。

そこで見覚えの無い巻物を自分の部屋から信兄が持つてきて広げて見せてくれた。

そこには見たこともない曲線と丸が重なった様な字のタイトルで始まり、その後は日本語で私の想像を絶する事が描かれていた。

.....

いやいや、冗談でしょ？

っていうか、冗談であつて欲しかった。

今までの幸せが日々が音を立てて崩れていくみたいだった。

「銀じいの気持ちも分からないではないけど……俺は夢をあきらめるわけにいかないだよ！」

さすがに勇兄も黙つていられなかつたんだろうな。怒りで震えてるのが分かつた。

「私だつて……やりたい事とかいっぱいあるし……！」

私も負けじと精一杯自分の意見を主張してみる。

「……うん……俺だつてバイト念のため辞めておかないといけない

……銀じいは時間を止めておくとは言つてくれたけど教員試験もあるしな……」

「……」

皆地球での生活が当たり前すぎてそんな事考えられないといった感じだった。

過去や先祖がどうあれ俺達は今を生きている。

信兄は体育の教師、勇兄はコックになりたい。

私だつて今の幸せを壊したくないよ。

「みんなの意見は分かつた」

「俺も思つていたことだし、もちろん……母さんや父さんが死んだわけじゃないと聞いてうれしかったし、連絡が出来ないっていうことはもしかしたらつていう気持ちで気にならないのは嘘なんだけど

……」

「兄貴……」

「信兄……」

「その……異世界に行ったとして、万が一こっちに戻れなかったとしたら悔やみきれない。勿論、お前たちが行ってもいいって気持ちなら考えたんだけどな……」

珍しく信兄が言いよどんでる。

きっと本気で迷っているんだ。

その様子が勇兄にも伝わったんだろう、凄く泣きそうな顔に一瞬だけなった。

とりあえず、一週間皆で考えて……今のところは銀じいには悪いけど断ろうという話になり

お開きとなった。

-----

あの後部屋に戻ってずっと考えてた。

考えれば考えるほど深みに嵌って行く自分がいた。

きっと信兄は本当は行きたいんだ。

それを迷わせているのは勇兄と私が反対したからに決まっている。

それでも私は友達と会えないのは辛い。

神様は本当はいないのかな？

私が贅沢すぎる環境だからなの？

教えてよ神様……。

一人シーツを噛んでメソメソしているとドアからコンコンと聞こえた。

「有希？起きてるか……？」

いつになく優しいげな勇兄の声。

「ごしごしと泣き跡を消して深呼吸をする。」

「ん……何？今から寝ようと思ってたところだよ？」

ゆっくりとドアを開ける、どうせ分かってて聞いてるんだろうから素直に認めてもいいんだけど、なんとなく照れくさかった。

「あー悪いなあ、ちよつと俺眠れなくてさあ……ホットチョコ作り

すぎちゃったんだよ」

勇兄は私が泣いているのをきづかないふりを装い、顔も見ずに私の部屋のベランダに向かう。

私も受け取ったホットチョコを零さない様気をつけながらベランダに出た。

まだ乾ききつてない涙跡に風がなでて泣きすぎて火照った頬にひんやりと心地よく感じた。

ホットチョコも冷えて凍えそうな心と体に染み渡っていく。

「なあ有希、お前はさ……兄貴の事好きか？」

「ブツ！ケホツケホ……い、いきなりどうしたのさ勇兄？」

「あーつきつたねえなあ……なんていうかさ、昔っから兄貴って自分より他人の事ばかりで頼ってくれない所があるじゃんか」

「あー分かるかも」

「だろ？だから昔さ凄く信用していない時期があったんだよ」

「へー？今の勇兄からは想像つかないや」

「あっはは！そうかもしんねえなあ……でもある日を境に考え方を変えたんだよな」

「ある日？それは？」

「まあ細かい事は気にすんな、それで、その考えって言うのは兄貴がオブラートに包む分俺がはつきり言っちゃまえば楽になるんじゃないかなって」

私の兄ながらどきっとした。

月に照らされてぼんやりとした明かりの中その困ったような照れくさそうな笑顔をしながら語る勇兄。

悪いけど私はシスコンの趣味なんて無いのよっ！不意打ちすぎるから！

もーなんというかこんな事で一々同様してる自分が気持ち悪っ。

「兄貴もそうだけど、お前も性格が似ちまったよな？」

少しとがめる様な目で私をにらむ。

「兄貴に気を使うのも分かるけど、言いたいことはちゃんと見えっ



て

「まあそれはいいとして、だ」

急に顔が泣きそうな顔になる。

「今回の兄貴の話方は久々にイラっとした」

「言いたい事があるならばつきり言っただけいいよ」

「私も……少し思った」

「だろ？」

「うん、私も本当は兄たちの事尊敬してるし。家族だから」

「そうか」

「友達とか彼氏とか会えないの寂しいけど……兄たちが居ないのは考えられないから」

「それで？」

「兄たちが一人でも行くって言うんだったら絶対についていくと思  
うし」

「ああ……」

「兄たちが居れば地球にたとえ離れてたとしても、万が一戻れなく  
ても、時間かかるかもしれないけどいつか良い思い出して言える」

「ああ……うん……」

勇兄は拙い私のお話を私の頭を撫でながら優しく聞いてくれた。

これがあるから勇兄は嫌いになれない。むしろ好きだ。

それに普段口が悪いのは言いたい事を本音で言っているからだ。  
裏を返せば嘘は絶対に言わないと思う。

気がついたら朝になって、私は布団をかけて寝ていた。

多分勇兄がこっくりこっくりしだした私をあわててベットに移し  
てくれたんだろうな。

朝の支度をし終わった頃に勇兄が起こしに来た。

睨みながら昨日の事を口止めされた。

以前こういふ事をしてくれた時に信兄に言ったら結構本気でなく  
られた事がある。

信兄は爆笑してたけど……。

なんだかもやもやとした物が無くなった気がした。

信兄には改めて自分の気持ちを伝えなきゃ。

友達にはいつもの2人と漢太には説明しておきたいかな……。

## 第二・五話 私の場合（後書き）

如何でしたでしょうか。

私も生物学上は女なので、女性ならではの視点で書かせていただきました。

## 第二・五話 俺の場合（前書き）

次男の勇次視点です。

時間枠が気になったので修正しました。

## 第二・五話 俺の場合

「集まってもらってごめんな……」

「兄貴、気にすんなって」

いきなりの召集。

兄貴が俺達2人そろって呼び出すなんて有希に彼氏が出来た時以來か？

まあいつも笑顔で見守ってるタイプの兄貴としては個別相談をしてくれる以外で全員呼び出すなんてめつたに無い。

相当大事なのか、物申す事でもあるんじゃないかねえか？

それに、兄貴が重要な話を話す前に暗い顔をのぞかせる。

正直、もったいぶってねえで早く話してくれよと思っていた。

「せっかく恵美と約束してたのにー！早くお風呂にも入りたいし……あいたっ」

そういう時に限って有希がふざけだすもんだから

「いちいちうるせえんだよ！とつとと座れよ！」

俺もつい軽くチョップをして八つ当たりをしてしまった。

本当は聞きたくない、そう顔に書いてあるみてえだったけど。

しばらく俺と有希の八つ当たり合戦は続き、いつもの様に兄貴に止められる。

なんだか、いつもどおりで少し落ち着いた。それはそれで八つ当たりしか出来ない自分がム力つくけどな。

八つ当たりが収まり静かになった後。

兄貴が見覚えの無い巻物を自分の部屋から持ってきて広げて見せてくれた。

そこには見たこともない曲線と丸が重なった様な字のタイトルで始まり、その後は日本語で俺の考えもつかねえ笑える話がか書かれていた。

- - - - -

兄貴の説明を聞いておかしいと思った。  
だっておかしいだろ？

俺は八つ当たりしても胸の奥では分かってたつもりだった。  
どちらにせよ八つ当たりしたい奴は今この場にいねえけどな。  
まだ見ぬ親父とお袋に殴ってやりたかった。

そして、それ以上に俺達に相談し、意見を聞いておいて尚どつち  
つかずの兄貴が悲しかった。

なんでだ？なんで嘘をつくんだよ？

いや、兄貴はきつと自分の意見なんか押し込めて俺達の意見を優  
先させる。

最初からそのつもりだったはずだ。

きつと、無意識すぎて気がついてねえんだろうな……。

それで、俺がなぜこんなに兄貴の事を尊敬しているのには訳があ  
る。

偶然じゃなくて必然というか、出来事なんてたまたまにしか過ぎ  
ないだろうけどな……。

- - - - -

少し、昔話をしてやろう。

俺がまだ鼻垂れ小僧で、兄貴の後ろに金魚の糞みたいにくっつい  
てた頃の話。

俺は今と違って病弱で気が弱い餓鬼だった。

なかなか背が伸びず、目つきも悪いという事もあったし

何か回りで起こるたびに大人や周りの餓鬼が全部俺に擦り付けや  
がって。

俺は何もやっていなかった。

俺も気が小せえもんだから言われるまま黙ってた。

目を閉じて耳を塞いで口を閉じればただ過ぎていけばいいんだと。

その度に銀じいにはれないように必死で兄貴が保護者代わりをして  
てくれて。

俺はそれでも何も言わなかったけど、大体信用ならなかった。  
親や先生に媚びへつらえてまでなんで謝ったり弁解する必要があ  
るんだろう。

俺は兄貴が自分の事でどういう風に感じてるかなんて考えようと  
もしなかった。

いやな大人に大して媚びへつらえてるのは自分の為だったなんて  
想像出来なかったしよ。

今考えると最低な事をしてた事が分かったけど。  
それでも、兄貴は絶対に責めようとはしなかった。

- - - - -

ちょうどその頃に捨て犬を見つけて空き家に毛布と水だけ置いて  
こっそり飼ってたんだ。

名前はハッピーって名前だった。

きつと俺は自分が幸せになりたくて飼い主の居ない犬に勝手に幸  
せを望んでたんじゃんねえかと思う。

ハッピーは最初子犬で弱弱しくて、俺とそっくりだった。

毎日えさをやって、散歩にも毎日連れて行った。

可愛くてほっとけねえ、そんな存在だった。

ある日いつもの空き家にハッピーが居ないのに気がついた。

俺は靴擦れになるくらい走って探し回った。

どうしても見つからなくて半ばあきらめ気味に戻った時に。

家の前にいつものいじめっ子のアイツが立ってて。

ハッピーの首輪を無理やり引つ張るような形で引き連れてて。

勝ち誇ったような顔でこう言った。

「この犬に怪我させたくなかったらお前が犬の代わりになれ」

悔しかった。

ハッピーを守る力さえないこの自分が。

言い負かすだけの頭脳すら無いこの自分が。

俺は泣きながらハッピーを抱きしめ、いじめられっこに殴られ続けた。

泣きながらささやかな抵抗で睨みつけた。

途中で感覚が無くなってしまったのかと思った。

痛みが無くなったから。

涙が目の傷に染みてきたので、汚い手でこすっていたら殴られていない事に気がついた。

前を見上げると別人の様にうなり声を上げながら殴りかかっている兄貴が居た。

「てめえら……一方向的に暴力を振るった事を一生後悔させてやるよ……！！！」

「お前らにとつてはな、どうでもいい犬かも知れないけどな、弟にとっては代わりの居ない大切な犬なんだよッ！！」

「ウラァ！！痛えだろ？！弟はな！もつと痛えんだよ！！弟がどんな気持ちで過ごしてきたか分かってんのかよおお！！」

最終的に家に居た銀じいに止められ、お互いに訳を話した後に銀じいから親と学校に知らせて訳を話して納得するという形で終わった。

さすがのモンスターペアレンツママも、銀じいには頭が上がりないうようだった。

銀じいが止めた時には俺も兄貴も涙と血と汗と泥まみれぐっしょぐしょでお互いにおかしくなって笑ってしまった。

兄貴は犬の事も俺の本当の考えも分かってくれていた。



犬は兄貴と話し合った結果近所の犬好きのおっさんをお願いする事にした。

それから俺は兄貴の事を憶れてる兄以上に一番のダチだと考えるようになった。

兄貴にもそう思っただけで欲しくて。

少しでも対等になりたくて。

あれから俺はひたすらに鍛えた。

めんどくさい大人の対応も、まだまだ兄貴には足元及ばないがそこそこ出来るようになった。

勉強だつてやったし、運動もやった。

勉強はまあ平均的にとれるようになったし、運動も弓道部に入るまでには成長した。

趣味の延長でコックになるって夢も出来たしな。

.....

最近は兄貴には良く頼られるようになった。

少しでも自分の理想に近づいた気がしてすげえ嬉しかったのよ.....

俺は話し合いが終わった後なかなか寝付けなかった。

気を紛らわす為に甘いもんが食べたくなり、専門外の拙い知識でチヨコのテンパリングを行いたらふく食ってやるうと。

そうしたら、多分二階の有希の部屋からだろ

犬のうなり声みてえな可愛くねえ声が細々と聞こえてきていた。

つたくだらしねえなあ.....悩んでんじゃねえよ.....まあ俺もただどな。

なんだかさつきまでのイラつきが収まってガラにも無く話しを聞いてやるうと思った。

いや、聞いたかっただけかもしれないな。

俺はテンパリングを終えたチヨコレートのボオルに少しずつホットミルクを流し込み。

ホットチョコを完成させると俺と有希用のコップに注ぎこんだ。  
おお、結構上手く出来たぜ。

我ながら上手く出来たホットチョコに無意識にはしゃぎながら犬  
つころの部屋へあがっていった。

- - - - -

「有希？起きてるか……？」

いつもの俺らしからぬ声に内心驚きながら有希の部屋の前で声を  
かける。

なんだかごそごそ音がする。

うはは、ホント犬みてえだな。

「ん……何？今から寝ようと思ってたところだよ？」

ゆっくりとドアが開く。

有希の顔を見た瞬間犬のうなり声は声を押し殺して泣いていたと  
分かった。

「あー悪いなあ、ちょっと俺眠れなくてさあ……ホットチョコ作り  
すぎちゃってよ」

これは本当。

正直俺一人で飲んだら鼻血が出るぜ。

俺は出来るだけ有希の顔を見ないようにきづかないふりを装って、  
乱暴に有希にホットチョコを渡すとすたすたと有希の部屋のベラン  
ダに向かう。

有希も受け取ったホットチョコにそつと反対側の手を添えてベラ  
ンダに出てきたのが見えた。

「なあ有希、お前はさ……兄貴の事好きか？」

「ブッ！ケホツケホ……い、いきなりどうしたのさ勇兄？」

「あーつきつたねえなあ……なんていうかさ、昔っから兄貴って自  
分より他人の事ばかりで頼ってくれない所があるじゃんか」

有希は、俺の発言に驚いたんだろう、ホットチョコを飛ばしやが  
った。

ああー服についちまった、まあいいや。

「あー分かるかも」

「だろ？だから昔さ凄く信用していない時期があったんだよ」

「へー？今の勇兄からは想像つかないや」

有希はいつの間にか涙がひっこんだんだろう、さっきまで泣いていたのが嘘のように嬉々としやべりかけた。

薄暗い空に所々瞬く無数の星。

頭上には月の光が差し、それが妹の長いまつげに当たって頬に影を作った。

艶のある髪の毛には月の光で反射した天使の輪がともっている。

「あつはは！そうかもしんねえなあ……でもある日を境に考え方を変えたんだよな」

「ある日？それは？」

「まあ細かい事は気にすんな、それで、その考えって言うのは兄貴がオブラートに包む分俺がはつきり言っちゃえば楽になるんじゃないかなって」

俺は少し言葉を選んで、話す。

直ぐ目の前には見慣れたはずの妹の有希の大きな瞳を覗く。

その瞳が星と同じように輝いて見えた。

「兄貴もそうだけど、お前も性格が似ちまったよな？」

妹に向かって軽く睨む。

「兄貴に気を使うのも分かるけど、言いたいことはちゃんと伝えて」

「まあそれはいいとして、だ」

妹には兄貴の様になってほしくない。

口に出す事は無いだろうが、妹の上手く肩を抜いていて、それでいて気性が激しい性格には俺は好ましく思っていた。

兄貴もそういう性格だったならな……いや、妹の性格は末っ子という事もあるんだろうけどよ。

「今回の兄貴の話方は久々にイラっとした」

「言いたい事があるならばつきり言っただけよ」

「私も……少し思った」

「だろ？」

「うん、私も本当は兄たちの事尊敬してるし。家族だから」

「そうか」

「友達とか彼氏とか会えないの寂しいけど……兄たちが居ないのは考えられないから」

「それで？」

「兄たちが一人でも行くって言うんだったら絶対についていくと思  
うし」

「ああ……」

「兄たちが居れば地球にたとえ離れてたとしても、万が一戻れなく  
ても、時間かかるかもしれないけどいつか良い思い出して言える」

「ああ……うん……」

「妹が必死に言葉を紡ぐ。」

「そうだ、俺達は血のつながっている「家族」なんだ。」

「家族」。

「昔の俺だつたら到底思いつかない単語だ。」

「最悪帰れなくても問題ない。」

「どんなに地球に帰ってきて俺達の事を忘れられたとしても、俺達  
という存在が居る。」

「兄貴、行こうぜ」異世界”って所へ。

「そして親父とお袋に会ったら兄貴の代わりに怒ってやるよ。」

「俺は自分の拳を握り締めると空に掲げた。」

「俺はもう迷わないぜ、兄貴はどうする？」

「流れ星がひとつ流れた気がした。」

-----

どうやら俺が照れくさい事をした後、有希が船を漕いでいるのに気がつく。

あー見られなくて良かったぜ。

妹のベットに置いてある毛布で妹を包み。

「よいしょっと、あー大きくなっちまってよー」

妹の大きさに成長を実感した。

窓を閉めて妹をベットに寝かせる。

今夜はいい夢を見れそうだ。

その日の朝有希に念のため口止め。

あつたりめえだろ！あんな兄貴に告げ口してみろ！

前に同じようなことをして妹に告げ口されてから暫く、兄貴のな

んともいえない嬉しそうな笑顔とからかいの言葉が続いたんだよっ！

## 第二・五話 俺の場合（後書き）

勇次はキャラが難しい……です。そしてありきたりの話ですいません……。

**第三話 波乱への扉（前書き）**

よろしくお願いします。

### 第三話 波乱への扉

「はあっはあはあ……ッゲホ」

某所にて雨の中音も出さずに走り続けている影があった。

短いスカートの水を払うように仰ぐ、もっとも既に払えないほど濡れていたが。

そこから覗く健康的な足は細く長く、それでいて少し筋肉質で、それ以外の条件も相まって彼女がただの少女だとは言いがたい。

まずは服装だ。

落ち着いた色で所々にスリットが入っている。

見る人が見れば風の抵抗を極力抑えた機能的なデザインになっているのに気がつくだろう。

その下は短い丈のスパッツになっており、綺麗なラインは見えども大事な部分はどんなに動いても見えない。

足には不思議な素材で出来たひざ当てがついているぴったりとしたブーツ。

腹から胸にかけてふくろの翼のような模様が刻まれている革鎧。それと連携してつながっているような肩当も付いている。

そして肉体的な特徴。

目の色は赤、髪の毛も赤で極めつけには狸の尻尾と耳が付いている。

その格好を見て通常であれば誰もが覗いてしまっただろうが、不思議と皆気がつかず通り過ぎていく。

彼女は日本でいうところの化け狸と呼ばれるものに近い。

近しいと表現したのは彼女の一族は元は地球生まれではないのだ。

彼女は遠い異世界で生まれた化け狸である。



厳密にいうと異世界では落人と呼ばれていた。

何故そう呼ばれるようになったかというところ、化ける動物の類は元々は神格の高い神の使いだった。

しかし、神を騙したりなんかの罪を負うと神の使いとしての力の一部を奪われ、力の弱い動物にされて神の城から追い出されたのだ。

追い出された動物たちは残っている力を使って外見を人間に変えた後、神に反発するように異世界内に神に見破られない強力な結界を張った村で肩を寄せ合っており、晩年暮らし死んだり生まれたりを繰り返して過しているのだという。

落人の特徴として、人になりきれないわずかな動物のパーツが残っている事と、相手に存在を認めさせない隠れる技術とすばやい動きである。

手先も器用なため好奇心旺盛な落人の一部は、冒険者または探索者のパートナーとして生活しているものが多いようだ。

彼女「ルビィ・ウィーコック」もその一人であった。

ルビィは信也達兄弟の母である「辰巳 零御」の御使いである。

元々冒険者として名高かった少女はある遺跡の調査をする任務を行っていた。

しかし、長年冒険者としてやってきた慢心かその遺跡の守護する魔物たちに捉えられてしまい手をかけられそうな時に助けられた。

その後、御使いとしての力に目覚め今日に至るわけだが。

今回、彼女は大切な主あかでもあり、親友でもある零御の頼みで彼女の子供達を捜しているのだ。

「どこ！どこなの？！お願い……早く彼女を救ってあげてよ！！」

幸い、泥るんでいる土などは無く殆どの大地はコンクリートで覆われていたので足を取られて体力を削られるという事はなかったが。

「……落ち着かないと、深呼吸をするのよ」

瞳を閉じ彼女と同じ力が無いか懸命に検索を行う。

必死の搜索のおかげかある程度エリアを絞り込むことが出来た。

「よし、さらに範囲を狭めて……苦しいけど耐えないと、きっと彼女の方が苦しいはずなんだから……」

彼女の大きな瞳に薄く涙がにじむ。

「泣いちゃだめ！」

必死に彼女は自分を励ましながら検索をひたすらかける。

例外でなく、異世界と呼ばれる世界は元々神の空想から生まれたものだ。

当然、すべてにおいて神の力によって存在している、よって自然の理をずらして新たな自然現象を起こすことはとてもやりやすくなっているが殆どが物理的なものともとの間接的な部分によって存在している地球では矛盾を強引に起こしている状態より非常に力を使ってしまう。

彼女はとても力の強い部類に入るのだが、有限である力を使い負担の大きいことをしてしまえば力の底が尽きてしまうのも時間の問題だった。

「……見つかった。きっとここが子供達の」

確認のため再度力を使い検索を行う。

間違いないと確認した時に力を使い果たし、気を失ってしまった。

- - - - -

今日はせつかくの土曜日なのに大雨だ、勿論事前に俺は天気予報で知っていたから洗濯はしていない。

カーテンを開けて天気の様子を伺う。

いつもの様に弟と妹の料理とお弁当は完璧に終わらせた。

「つといけない！手紙送っておくの忘れてたわ」

確か、家の前の道路の先にポストがあったはずだ。

わざわざ少しの間歩くだけだ、多少濡れても問題ないだろ。

俺は面倒だという事で、傘を差さずに外に出る。

少し雨が頭から髪の毛を伝って落ちてくるのがくすぐったい。

小走りでポストに向かう。

ポストへはがきを入れ終わると自分家の敷地内の庭に倒れている女の人が居るのに気がついた。

「あ、あの……大丈夫ですか……？」

あわてて駆け寄るが反応が無い、んー、まさか死んでないよな？  
改めて見ると凄く不思議な格好をしていた。

そして耳……？何だろうアクセサリーだろうか。

「おーい、風邪引きますよ〜？」

ゆすつてみたが起きる様子はない。

呼吸はしているようだけど弱々しい気がするどうしようか、具合悪いのか？

そのままにするのにも申し訳が無いと思い、仕方なく女性を抱え込み家まで何とか運び、軽く手足を拭いて静かに寝かせた。

ちょうど朝ごはんを食べようとしていた有希と勇次が酷くびっくりしていたので

勇次にはご飯食べてもらい、有希に簡単に状況を説明し、ご飯でも食べている。

暫くするとゆっくりとドアが開き有希が顔を覗かせた。

「信兄？着替え終わったから布団に寝かせてあげて？」

「勇次、悪いけど手伝ってくれないか」

「分かった」

勇次に手伝ってもらい、あまり動かさないようにして運ぶ。

とりあえず客間に布団をしき、そこに寝かせる事にした。

- - - - -

ずかんそくねつ

頭寒足熱の法則にしたがって掛け布団をかけて頭には熱を冷ますシートをのせる。

そのまま放置しているわけにも行かず、試験のテキストを持ってきて客間でやる事にする。

テキストを目を通しながら不思議な客人をどう扱うか考えあぐねていた頃。

突然、がばりと音がして不思議な客人に目を向ける。

「つは！ここどこ?!」

なんだか混乱しているみたいだキョロキョロ周りを見渡している。暫くすると俺が居るのに気がついたみたいだ。

なんだか混乱すると思い、どう声をかけようものか迷っていたんだけどな。

「あ、はじめましてえーっと……」

「!?!」

俺を見たたんその人は酷くあわてていて、いきなり布団をどかし土下座の格好に。

「貴方は?!辰巳家次期党首とお見受けいたします、今回の突然の訪問をお許してください」

さっきの驚いていた時の口調とは打って変わり、丁寧な口調に変わって少し驚いた。

「……はい、確かに今は俺が一番年上で家主扱いになってますが……貴方はどちら様でしょうか……?」

「?!まさかまだ力は目覚めていらっしやないのですか……」

「……えっと」

「失礼いたしました、私は「ルビィ・ウィーコック」と申します。

貴方の母である零御様の御使用でございます」

頭をふかぶかと下げ、完全に土下座の格好だ。

土下座ってドラマやなんかで良く見るけど、あんまり気持ちのいい物じゃないんだな。

「どうか顔を上げてください……私は辰巳信也といいます。まだ銀じいええと銀郎から話を伺ったばかりでピンと来てはいないのですが」

「ルビイさんは俺の母さんの御使いさんって事ですね  
少し、緊張を解く。」

ルビイさんは安堵の表情を浮かべていたが慌ててかきこまりこう  
言った。

「大変ご迷惑を承知で申し上げます、私は零御様の命で地球に赴き  
信也様方に協力をお願いしようと思ひ訪問いたしました」

「協力、ですか？」

「はい、今はアイネ ファンタジー プラネット、えっと地球から  
言う所の異世界ですねそこは平和を保っては居ますが」

「はい」

「あと100年後には私達の住んでいる異世界も滅んでしまうので  
す」

「お願い！助けてください！！私達御使いの力では力量不足で……」  
ルビイさんは瞳に涙が零れそうになっている。

「そしてこのままでは信也様のお父様、お母様もいずれ……いいえ  
その為をお願い申し上げたのです……！！」

そんな事は考えられないと軽く頭を振る。

もう何がなんだか……。

この間、つい2日前前に聞いたばかりだというのに。

やっと先輩と話して落ち着いてきたというのに。

どうしてこう物事は緩やかに穏やかに進んじゃくれないのだろう  
か……。

「っ……それはどういつつ！あ、えつとすいません一度弟と妹も家  
に居るので呼んできていいでしょうか」

「はあはあ……すいません私も、少し焦りすぎていたみたいですが、  
お願いいたします」

「……はい、申し訳ありませんが少々お待ちください」  
ゆっくりとふすまを閉める。

.....

- - -  
柱を背に少し寄りかかった。

体がしびれたようになんだか痛い。

心臓の音がうるさい、どうか静まってくれ。

瞳を閉じ落ち着かせる。

これはもう戻れないという事なんじゃないか、引き返せないという  
ことじゃないか。

俺の長男としての責任感が今の自分を支えていた。

しゃんとしろ！こんな情けない姿なんて見せられるか！

自分の胸の上に拳を乗せる。

俺は波乱への入り口までの道が僅かだと言う事を悟った。

腹を決めよう、これはきつと俺自身の戦いの始まりだ。

自分の両頬を両手で強く叩き弟と妹を呼ぶために廊下を歩き出した。

### 第三話 波乱への扉（後書き）

急いでる空気感がうまく出せるようになりたいです。

#### 第四話 悲しみの先の僅かな希望

俺は、有希と勇次の待つ居間へと向かった。

どうやらルビイさんが起きたのに気がついていたので、2人共ご飯の片付けを終えてテーブルで待っていてくれたらしい。

「有希、勇次。すまないが話があるからこっち来てもらえないか？」  
「うん」

「ああ、分かった」

客間のドアを開けて2人を並んで座らせると自分も座る。

「少し遅くなりました」

「問題ありません」

「俺の隣に座っているのが弟の勇次でその隣に居るのが有希です」

「よろしく願います」

「よろしく願いあいます、先ほど雨で濡れていたみたいなので私が着替えをさせていただきました」

「あ、ルビイと申します。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

お互いにお辞儀をする、我が弟、妹ながら初対面の人には丁寧な言葉を使う癖が付いているようで、少し誇らしい。

「それでは、人数もそろいましたしお話を改めて伺いたいと思っ  
ているのですが体調の方はいかがですか？」

「かまいませんよ、元々私の方がお願いする立場なのですから」

「有希、勇次要点だけルビイさんにも確認を含めて説明する。良く  
聞いてくれ」

「まず、ルビイさんは俺達の母さんの御使いらしい」

「お袋の御使いの人なのか」

「お母さんの御使いなのね……」



「では、お互いに自己紹介も終わった事ですし次の話を進めさせていただきます」

「貴方方のお母様である零御様が今大変な事になっているのです、今は余裕が少しだけあってなんとかその場に行ってしゃべる事は出来るのですが……」

「貴方方の言う異世界と呼ばれる世界の出来たあらしというのは、神の仮定によって作られたというお話はご存知ですね」

「……はい」

「そこで人間以外の長寿の種族などは気をつけなければいけない存在が居るの」

「それは亜空魔族と呼ばれる者達で……」

「悪魔族ですか？」

「いいえ、違います。亜空間の亜空と魔族書いて亜空魔族です」

「亜空魔はその名のとおり、時空の歪みから発生する亜空間から生まれ出る魔物という意味で姿は体が美しい人間で手足が昆虫の手足のようになっており、決して強くは無い力の弱い種族です」

「その亜空魔族が良く空から降ってくるようになってしまったのです」

俺は思わず疑問に思ったことを口に出していた。

「亜空魔族が弱いのであれば襲われた時に裁く事は出来ないのですか？あ……口を挟んでしまつてすみません……」

「御気になさらずに、確かにそういった発想が最初は出た事があったのですが……その行為はとても危険な事が分かったのです」

ルビイさんは少し悲しそうな笑顔で答えてくれた。

「危険とは？」

「はい、亜空魔族は寄生を行い力を付け子供を授かります。人を襲う種族なのです」

「人を襲う？何故ですか？」

「はい、弱い種族ゆえになのでしょう。亜空魔族は単独では弱いので

ですが、他の種族に寄生する事によって寄生した個体を意のままに操る事が出来るそうです」

「意のままに操る……?」

「はい、しかも亜空魔族は幻を産み出す事をもっとも得意とする種族です」

「騙されてしまうのですか?」

「そうなのです、しかも一度かかるとそう解く事が出来ません……」

ルビイさんいわく術を終えるには2種類の方法がある。

一つは術にかかる前に反射する方法。

しかし、反射する術というのは基本的に精神力が物理的に例えば炎といった様な具現化された物に対しての跳ね返すという精神力を具現化するというのはやりやすいが、幻を具現化した物を跳ね返すという術は具現化しづらいのだそうだ。

「幻はあくまで幻なのです。例えば誰かが目に見えない気持ちを想像した者を具現化させると言う発想も通常では難しいですし、それを跳ね返そうという発想も想像出来ないと思いませんか?」

「確かに……言われて見ればそうかもしれないです」

確かにそうだ。ファンタジー小説なども学生の頃は良く読んでいたので魔法というものが当たり前に存在しすぎてその発想が浮かんでいなかったが、人の思いを具現化するという発想はあまりにも抽象的過ぎて捉えづらい。

ましてはそれを反射する?創造がつかないな。

ふと弟と妹が反応が無いと思い、振り返って見たんだけど俯くばかりで表情は読み取れなかった。

今はとりあえず話しを聞こうと思い、ルビイさんの方を向きなおした。

もう一つは本人が中止または終了する方法。

それも、かけた本人が寄生するとはいえ既に寄生している状態で

自らの意思で停止する気は無いし、かといってこちらが意図的にやるうとする前に既に寄生している訳だから出来るはずも無い。

「では、今現在はどの様に防いでいるのですか？」

「世界一体を包み込む大きなバリアを張っているのです。自らの命を引き換えにして、ですが……」

「え……それはどういうことなのですか？！母さんは何をしているのですか？！」

「だから！貴方方のお母様が大きなバリアを張っているのです！！！」

ルビイさんも限界だったようだ。

本当はというと俺も爆発寸前だった。

何で母さんが犠牲にならなければいけない？

もつと、他に有能な人は沢山いるだろう……？！

ルビイさんは力尽きたように体を丸めていた。

多分、泣いているのだろう、直ぐ下の白いシートに水がポタポタをと濡れている。

「……うっぐすっ私に……私達御使いにもつと力があればここまでしなくても良かったのかもしれませんが」

「元々、そういう決まりごとがあった、という……のっ、他にこの様な広範囲を防御する手段を誰も持ち合わせていなかったのです」

「各種族の族長などにはせめてもの足しとして族ごとの精一杯のエネルギーの元となる、精石というのと安全に術を駆使出来る場所の提供をしていただいております」

「そのお陰もあって、少し余裕があるという程度で、零御様はその場を動く事が出来ず、他で費やせる力というのはあまり多いとはいえません……」

「私はせめてもの助けと思いここに参りました。信也様達には原因の調査と……出来れば解決にまでこぎつけて欲しいのです。協力してもらおうというのは最初は零御様も反対されておりましたが……現

段階では代価案も無く……その、申し訳つ……ありません……！」「……そんな……意味の無い謝罪なんて、要らないですよ……！」  
勇次が床に拳を叩きつけた音が響く。

ルビイさんは布団に頭を打ちつけるようにして土下座をしている。布団はルビイさんの涙で濡れそぼっていた。

有希も涙をぬぐう事もせずルビイさんを無表情で見つけているみたいだ。

怒りの矛先をルビイさんに向けられるもおかしいのは勇次も分かっているはずだ。

俺もルビイさんに怒りを無意識に向けようとしていたようで、睨んでしまった表情を意識的に緩める。

「そうですね、ルビイさん。謝つても仕方ありませんよ？今は謝罪よりも実行するべきなんですから、ほらそんな顔しないで下さい」

「それと、もう敬語は止めないか。これからも付き合いはあると思うし、ルビイさんも敬語使うの大変そうみたいだし、な？」

俺は勤めて柔らかい表情を出してルビイさんを励ます。

ルビイさんは小さくありがとうと呟いたのが聞こえた。

今はそんな事やっている場合じゃない。

もしかしたら危険は多いかもしれないけど逆に考えれば俺達なら解決できるかもしれないのであれば……。

「俺は、俺達は小さい頃から母さんや父さんが居ないと言われて過ごしてきました。だから居るって聞いた時は凄く嬉しかったんです」

「でも母さんは言い方は悪いですが、きっと母さんの命の力で今やつと異世界を守っている」

「俺は、母さんの顔も見た事は無いけれど母さんがせっかく守った世界を無駄には出来ない……後悔はしたくない」

「それに俺達が早く助け出せば母さんと生活できるかも知れないぜ、兄貴」

勇次がウインクして見せた。

っは！言ってくれよ！

「そっだよ！皆でお母さん助けようよ！」  
と有希。

「勿論、私も連れてってね！微力ながら助太刀するわ！」

とルビイさんが目を真つ赤にして微笑んだ。

「行ってくれるか？みんな」

「あたりめえよ」

「行くなつて言っても兄たちについてくよ」

「皆さん……本当にありがとう」

雨降って地固まると言うけど……天気も俺達の気持ちを代弁する  
かのように、いつの間にか雨雲に光が差し始めた。

父さんの行方については、ルビイさんが聞いた母さんの話だと異  
世界のどこかで旅を続けながら原因を調査しに行ってるみたいだ。

行こう異世界へ。

俺達に何が出来るかわからないけど、後悔しない為に！母さんと  
父さんを助けるために……

胸が温かい気持ちでいっぱいになる。

それと同時に気持ちがあストンと落ち着いたのを感じた。

ああ……俺がしたかったのはこれなのか。

と、そこへ軽い爆発とともに煙が上がる。

「ケホッ、な、なに?!」

俺達が煙の発生源を探していると知っているような声が出た。

「お前達、儂を忘れてもらっては困るのう……」

「銀じい!!どうして?!え、どういっ……?」

「ファッファファ!驚いて折るようじゃの?」

いたずらが成功した子供の様な笑顔をした銀じいが居た。

「お前達が、異世界に行くにしてもまだ二、三日待ってもらわう必要  
があるんじゃない」

「異世界からの世界の応答を確認するには一週間かかるから……」

「そこでじゃ、その間にしたくと軽く準備をしてもらってから異世界に行ってもらう」

これからにぎやかになりそうだ。

お互いに笑いあう、どんな困難があつたとしても乗り越えて行ける。

俺はそう感じずにはいられなかった。

## 異世界について（銀じいの巻物）（前書き）

こんにちは、守護人たちへを読んでくださりいつもありがとうございます。

作者の鈴華と申します。

今話につきましては、異世界に主人公達が突入する前に異世界についての世界観、ルール等についての説明とさせていただきます。勿論、ある程度の説明は入れますがあまり長い説明は極力省こうと思っているので、お手数ですが混乱時にはこちらの方で確認お願いいたします。

ではご覧ください。

## 異世界について（銀じいの巻物）

現段階の登場人物

異世界への旅に同行する仲間達と兄弟と妹の紹介です。

辰巳 信也

年齢22歳 男

メインの主人公視点の信也君です。

見た目はこげ茶の髪に少し色素の薄い青みがかった黒。

身長180？体重70k中肉中背。

体育大学を卒業し、教育職員免許の勉強中。

将来は体育教師になるのが夢。

本来は面倒見がいい兄貴タイプなはずが最近はありえない事件の連続で情緒不安定気味です。

趣味は家事全般と読書家事の腕はおかん級。

最近の悩みは妹の扱い方について悩んでいます。

実はあるトラウマを抱えています、すぐには出しません。

辰巳 勇次

年齢18歳 男

こげ茶の髪に茶色の瞳。

身長173？体重56k中肉中背。

信也の弟。

コックを目指しており、現在調理師の勉強中。

実はメガネ君で普段はコンタクトしてます。

口は悪く、誤解されやすいが根は素直ないい子です。

割と空気読むのが得意で信也をサポートする。

信也の事は尊敬している

激しい運動は苦手だが、弓道部に所属しており弓の腕はぴかーで



す。

辰巳 有希

年齢16歳 女

こげ茶の髪に茶色の瞳。

身長148? 体重40k 中肉中背。

信也の妹。

水泳部の期待の星……らしいです。

将来何になりたいか悩んでみたいです。

子供だけど大人に扱ってほしい難しいお年頃。

信也、勇次の事は尊敬しているが、口では言ったことない。

言動は割とズバズバ言って猪突猛進に思われるけど頭ではかなり冷静。

辰巳 銀朗

精神族の攻防人。

グレーの髪に黒い瞳。

身長168cm 体重60K 少し筋肉質。

信也達の育ての親。

1520歳が本当の年齢であるが、人間界では85歳で肉体が滅びた。(2年前)

元は精神族であるため死んだばかりの死体か力のある物であれば移ることが可能。

ルビィ・ウィーコック

赤い髪に赤い瞳。

身長160cm 体重50k 全体的に引き締まった柔軟な肉体。

信也達の母親御使い。

獣神族の化け狸の女性。

説明は有りませんが、獣神族の中で一番化ける力が強くて非常に

出来る人。

本当は堅苦しいのが苦手だけど公私混同は弁えようとする真面目な人。

狸なのは完全に私の趣味です。

狸って可愛いよね！

では、次に世界観 仕組みについて。

異世界 パラレルワールドとも呼ばれる。

元々は神の仮定から出来たものだと言われる。

昔、地球に生物が誕生し恐竜が世界を支配していた頃、大きな惑星が地球にぶつかり地球と月が分離したときに恐竜の力がもし惑星の力を上回り、地にぶつかる衝撃を抑えられたとしたら地球はどのようなになったのかという神の仮定から生まれた惑星。

仮定という幻想にも等しい原理なためすべてにおいて神の力で出ている。

そのため宇宙にはいるものの太陽の光が当たったとしても光の屈折で何かがそこにはあると思われるだけで、実態をつかむことは難しくましては照り付けない時間帯においては宇宙のわずかな星の光では到底見ることはかなわない。

その惑星は俗に言う「異世界」と呼ばれるものである。

こちらではパラレルワールドと呼ばれているが、その惑星の人たちからすると当たり前前に存在している世界なので呼び方が違う。

異世界と地球について。

異世界は神の過程から生まれているので地球よりもすべてにおいて負担が少なく、異世界の者が地球に行くとき力を使ったり移動するだけで体力の消耗が激しい。

逆に地球の者が異世界に行くと負担が軽くなり身体能力などが通常より上昇しやすくなる。

その性質を利用したのが守護人の育て方である。

「種族について」

守護人とは

守護人神の血と涙それと人間と妖精から作られた種族。

そのプロトタイプが神使族である。

しかし神使族では守護人のそれと違い未完成なために、力の強い神の力に小さな体が耐え切れず。

ある条件で暴走してしまったりするが、守護人はそれはありません。

人寄りである為に最初はとても精神、肉体が弱いが人間のいいところである成長する力がありとても柔軟性に優れている。

神の血と涙の力である神力や人の力である道具を扱い創造する力、精霊の力が使えるが、その力の源は大地や生き物などを体内接種したときに消化器官と共に睡眠時間などに無意識に行う

また妖精族の特徴ともいわれる光合成によっても供給される。

其々の個体によって受け継がれる力は異なるが男は攻撃寄りで女性は守り寄りな場合が多い

守護神であるがゆえに不老不死の存在であるが、世代交代すると人間に戻りその後老いて死ぬ。

世界の犠牲者とも言われている、その代わり役目を全うし人間となった時には神の褒美として一つだけ願いをかなえることを許されるという。

御使い

守護神1人につき人族ではない者から5人選ばれる。

その種族が選ばれるかわからない。

物（武器や防具）か精神か動物が存在か不明。

妖精族

光合成や大地の植物に力を分けてもらい、力を駆使する事が出来る。

特徴として頭に生えている半透明の触覚と昆虫のような羽をもつ。役割はすべての大地の力を使える膨大なエネルギーを分散させる役目をもつ

正しき者に力を分け与えたり、悪しきものにさばきを与える。

#### 人族

すべての祖であるといわれている。

体の構成などは人間を元に作られているものが多い。

これといって力を持たないが元は神がすべての種族の基礎になるように作られた為、繁殖力と成長力に優れており、また知性が高くすべてにおいての創造の力を持ち。

族と族を取り持つ役割を持つ。

故に人間と書いて人間と呼ばれる事もある。

#### 獣族

知性が低く身体能力が高い獣と成長、繁殖、知性がある人間がかけ合わさってできた。

見かけとは裏腹に温厚なものが多い。

部族として暮らしており、国と国を渡り歩き行商人になるものが多い。

役割は世界の監視、神への連絡係。

#### 精神族

すべての生き物の肉体が朽ちた後に残る精神。

膨大な数を誇る。

獣族と協力しともに連絡を行ったり、妖精族の補佐も行う。

他族がたどり着くことない天空の島に住む。

精神族は朽ちたばかりの肉体を用いて生活する事が出来る。

しかし、一度使った肉体に再度入ることは出来ない。

#### 竜族

元は隕石の力を弱めた恐竜たちが、惑星を守った褒美にと神の一部を分け与えたのが祖だとされる。

神ともっとも親しく対等に近いとされ、世界の象徴。

#### 翼族

スバルナという美しい翼を持つ者の意とも呼ばれる。

腕力はあるが後は飛ぶことが出来るのみとなっており

美しい容姿のものが多く。

古来から移動の際に配達人として使われていたとされる。

翼は高く売れるが、違法。

#### 獣神族

神の力と獣の力、人の血を混ぜて作られた。

元々は神格の高い神の使いだった。

神を騙したりなんかの罪を負うと神の使いとしての力の一部を

奪われ、力の弱い動物にされて神の城から追い出された。

追い出された動物たちは残っている力を使つて外見を人間に変え

た後、神に反発するように異世界内に神に見破られない強力な結界

を張った村で肩を寄せ合つて晩年暮らし死んだり生まれたりを繰り返

返し過ごしているのだという。

落人の特徴として人になりきれないわずかな動物のパーツが残っている事と、相手に存在を認めさせない隠れる技術とすばやい動きである。

手先も器用なため好奇心旺盛な落人の一部は冒険者または探索者のパートナーとして生活しているものが多い。(第三話一部抜粋)

## 亜空魔族

亜空間の歪みから生まれた古の時代からの排除される存在。姿は美しい人間の体に昆虫の手足になっている。

幻を見せ人間に近づき人間に寄生し破壊行動を繰り返しながら人間の心臓を毛細血管から管を通して無痛で通し心臓を食い破る。

人間に寄生する前の亜空魔族は小さな子供くらいの大きさで力は決して強くないし食い破るのも直ぐでは無く約50年ほどかかりじっくり壊していくので人間等にはあまり被害にならずに肉体が滅びるが、多種族でも見破れない幻を見せるのが厄介。

## 魔物

動物から負の精神をもって生み出されたとされる。攻撃的で知性が低い。

## 聖物

正の精神をもって生み出され、神の手が加えられたものの事。温厚で義理堅い、知性がある。

## 動物

一般的な家畜や人と暮らしている物の事。牛、豚などがそれにあたる。

## 「世界の職業」

### 商人

お金を扱い商売をするものたちの事。  
すべての商売においてお金の管理は商人の仕事。

### 料理人・職人

商人とペアになり商いを行う、それぞれ店をやるには試験を行い権利書を発行しなければならぬ。

#### 医療人

漢方や塗り薬など生活に必要なものを扱う者。

処方されたものであれば一般が扱えるが中毒性、生命にかかわる薬などはこも者の取り扱いが 必要。

#### 攻防人

戦いで生計を立てる者の事を一般的に言う。

国の専属になったり、自由に世界を渡り歩いたりする。

ただし、生命に危険があつた場合や例外として許される立場であるもの（王族や守護人がこれにあたる）であれば問題ない。

その場合は役所へ申し出て証明書と引き換えてもらう必要がある。

#### 石使い

一般的には精石を使い自分の血肉や精神力でそれを補い、世界の理を避けて火を放つたり、水を飛ばしたりするものの事をいう。

別名マジシャンとも呼ばれる。

即座の判断能力そして生まれ持った精神力などを使うため

体力の消耗が激しくそれを抑えるためのマジックアイテム、精石などを使う必要がある

ものにするにはお金と時間が必要。

#### 化け術使い

獣聖族が独自に唱える化け術を使い、気配を消したり、見えない所を除く術、別の人に変装する等に長けていて

レンジャーの様な役割を果たす。

また、術を駆使可能な獣聖族達は種族的に速さにたけた者が多く持前のスピードを生かした攻撃や万物の力を使って現象を引き起こ

したりもする。

#### 占い師

精神力が秘められた、タロットカードを使い想いの力で現象を具現化する。

また手のひらサイズの丸い水晶を持っていて、その水晶に精神力を与える事によって実態の無い武器を作り出す。

#### 精霊使い

精霊の好むアイテムや贄（食べ物や物）を使い精霊の力を借りて自然現象を起こすもの事

例外として精霊が気に入った相手や恩の礼としてお互いの血を10分の1交換し合い

呼びかけのみで起こすものも居る。

精霊の力はそれに対応するエリア、対象がないと効果が発揮されずらい。

もしくはある一定の制約において発動させることも可能。

#### 聖物使い

神からの依頼に遂行できるもののみ譲り受けることが出来る聖物を駆使するもの事

神からの証が必要で極稀。

#### 魔法使い

悪しき者の力である魔力を用いて自然の理に反する力を駆使する。無理やり理を捻じ曲げるため、空間が歪んだり己が滅びることがある。

使っただけで世界の取り締まり対象となり、極悪人扱いとなる。何故極悪人になるかという理由は2つです。



1、魔力は人間にはなく亜歪魔族と呼ばれる種族の血を使って注発動する事が出来る為注入する必要がある、やりすぎると亜歪魔にカモにされやすい。

2、そもそも、亜歪魔を近づける事が危険な為。

能力の話、一般に魔法と呼ばれる者は邪道と認識され、口を出すのとはばかれる。

変わりに精霊術（精霊を駆使して術をだす）か精石術（精神力から作られる石動物や種族の精神によって若干違うが、感情の高ぶりなどで出来る）や聖物魔法（聖物を駆使する）が発達している。

お金の説明。

お金

単位＝リング

色で分けられる

黒リング＝1円

緑リング＝10円

赤リング＝100円

青リング＝1000円

黄リング＝10000円

白リング＝10000000円

それ以上の多い場合はカードで代用される。

生活用品などは日本より安いが交通費、武器やアクセサリ、防具は高い。

長くてもうしわけありませんでした。

次回からは通常の話に戻ります。

## 第五話 異世界へ（前編）

小鳥が歌う。

葉が踊り、花は笑う。

太陽の日差しが木々の葉と葉の隙間から差し込んで。

草木が風に吹かれ囁いている。

まるで大地が喜んでいようような森の中

俺達は芝生の下で腰を下ろし、直ぐ傍の湧き水を汲んできてくれるであろう銀じいを待っていた。

- - - - -

俺達は今、異世界という地に降り立ち、その大地に座っている。

ここは異世界「アイネ ファンタジー プラネット」の聖印の森という所。

ここらへん一体、むやみに近づかぬ様に結界が張り巡らされた森に囲まれていて、近くのここから南にあるリーフォレストという街までおよそ400km程の距離。

24時間歩きっぱなしで大体4日と少しかかる計算の距離だそう  
だ。

地球からこの世界に来るために使う移転装置がその森の中の血により幾重にも結界を施された場所の為そうそう人里に作るわけにも行かなかった様だ。

（つまり俺達の様な守護人かその血をわけ与えられた順ずる者のみ結界内に立ち入れる事が出来る）

異世界に行く決めて異世界に降り立つ3日間の訓練はそれはそれは大変だった。

異世界は地球とは違い誰かの手を加えていない辺境の地のような

場所がいたる所に存在する。

異世界で生きていくためのその為に銀じいから手解きを受け、訓練を行った。

まずは自分が傷つけられても冷静で居られるようにする訓練。

銀じいの話によると俺達は決して死ぬ事がない様に造られているそうだ。

ただ、人間の構造上と機能性として痛みというのは備わっている。切られたら痛いし、血が出るしヒリヒリするのはかわらないのだ。

ただ守護人なので死んでしまうという事は無いが、体がいくら強くても心は防具もつけられないし術などでも補えない。

怪我をして恐怖で武器が握れないという事があつては大切な者を守る事が出来なくなるかもしれない。

そのような事が無いように痛みになれるという事をやった。

銀じいから指示されたやり方はとても簡単だ。

包丁の刃の部分握り続けて慣らすというものだった。

刃を握るとしびれるような痛みと共に血がぼたぼたと落ちる。

俺達は人間の致死量に至ったとしてもまた赤ん坊として生まれ変わる位らしいから相当な者だ。

影も形も無くなったとしてもまた赤ん坊として生まれ変わる位らしいから相当な者だ。

この訓練は俺達の性質を持って始めて出来る物で人間だったら死んでいるだろう。

風呂場で行ったが、床が血の海の様になり有希なんて恐怖で気を失ったりして大変だった。

3日間ではまだまだ足りなかった勿論初めてるときよりは少しなれたのかもしれないが。

今回の調査の上で訓練していくしかないのだろう。

もう一つは命を奪う事にも戸惑わないようにする訓練だ。

ルビイに協力してもらい、人の形をした木を元に擬似的に人を作る。

化け術を組み合わせさせてこちらが攻撃した時に肉を切る感覚と血が流れていると錯覚する様に施してもらった。

これも慣れる事は3日間では出来なかった。

刺す度に伝わる肉の感触。

流れ出る血、変形する肉。

俺達は決して守護人に元々なるべくしてなったという訳ではない。なのに血が覚えているというのか上手く表現出来ないがその対象物が敵だと認識したとたんに血が沸き立つような高揚感に包まれ気がついていたら「舞っていた」のだ。

自分の時はどの様に見えているかなんて気にも留めていなかったけど、ルビイさんが取ってくれた俺の戦闘時のカメラ映像を見て自分でぞつとしてしまった。

本当に舞っているのだ、そういった事は素人なのでまったく分からないのだが。

まるで日本舞踊でも踊っているかのようだった。

これは銀じいの言うところによると、血が覚えているという事なんだとか。

気持ち悪くなったのは人の形をしていた物が肉片になった事も関係がないとは言えないが、仮にも今まで平和に過ごして死とは無縁の世界で生きていたのに関わらず、命を奪う事に躊躇せず実行できてしまった俺達自身が気持ち悪いと思ってしまった。

当然、一目目は何も食べる気にもなれず肉類を見ただけで吐き気を催していたが、異世界に降り立って移動の為の装置から降りすぐに、この世界で生きていく事の厳しさをまのあたりにしてしまい、自分の意識を改めた。

人が死んでいるのだ。

既にミイラ化が進行している。

銀じいの話によるとこの者は服装から見て地球から間違えて降り立ってしまった遭難者ではないか、との事。

この場所は周りは木が生い茂っているばかりで人の気配が無いところである。

予備知識も無いまま突然ここに来て何もかもが整備されている現代での暮らしに慣れた人にとっては決して愉快な状況ではない。

自然界は大らかではあるが来る者拒まず、去る者は追わない。

しかも、結界内に入りこんでしまっているとなると、その結界内の防衛システム者達に処分された可能性もぬぐえないとの事。

何かの生物が居なくなつたとしても世界にとっては些細な事に過ぎないのだから。

そう考えると俺達の戦闘能力は有難い物だつたと思ひ直すようになった。

例えば毒蛇が俺達を襲つてくるとしよう。

俺達の皮膚を傷つけられる前に無意識に叩き割る事が出来るのだ。これほど心強いものは無かつた。

-----

今は一旦休憩を取っているところだつた。

「待たせたな、水じゃぞい」

行くときに持ってきていた水筒を両手に抱えて持つてくる銀じい。精神族というのは不思議なものだ。

実体があるようで無い、体が半透明に透けている。

物なども意識すれば持つ事も可能であるし、逆に持てなくすることも出来るらしい。

ぼんやりと色々な事を考えながら、銀じいから受け取つた水筒をそれぞれ兄弟達に分け、事前に持つてきていた保存食を口に含む。

本当なら俺か勇次がそこら辺の果実や肉を使って調理をしたいと

ころだが、まずは一旦の拠点となる住処すみかが欲しい所だ。

一刻も早く街に進みたいところである。

その為にも料理を悠長に作っている暇など無かった。

「食べ終わったらすぐに歩きましょう。一刻も早くまずは街に向かわないと生活が出来ないわ」

ルビイさんに言われた通りに俺達は手早く食事を済ませると、ひたすらに歩き続けた。

ただ生きるため、歩くためだけに黙々と食べ、ろくに話もしないで何度目かの夜空と青空の風景を繰り返したのだった。

暫く俺達は歩き続け、いい加減同じような森の景色にうんざりしていた頃大勢の人の話し声が聞こえてきた。

恐らく、街に近づいて来たのだろうか。

今までぐったりして何も口を開こうともしていなかった有希が明るい声で俺に話しかける。

「信兄い！！街に近づいて来たんじゃない？！早く行こうよ！！」

俺達をせかす様に有希が走っていく。

「おい、ガキみたいにはしゃいでんなよ！怪我でもしたらどうすんだ！」

勇次が慌ててそれを追いかける。

「あはは、2人とも元気だな」

俺がその後から追いかけるように小走りする。

銀じいとルビイさんは……よし、ちゃんと付いてきている様だ。

「何言ってるの信兄！信兄が一番運動神経いいんだから！先に行つて引つ張つてくれないと！」

有希が腕を組みながら、上目遣いで頬を膨らませて怒る。

「こついつしぐさはまだまだ子供っぽいな。」

思わず有希の頭に手を乗せて軽く撫でた。

「わかったわかった、その代わり後ろにも気を配ってくれよ？」

「兄貴、俺が見張ってるよ」

「頼んだよ」

「もー！何よ兄達2人して！子ども扱いしないでよね！！」

「わーもう、うるせえなあ……！！」

「何よ！」

いつもの喧嘩だ、あいつらホント仲良いな。

そう思いながら先に進むと視界が急に開ける。

街だ、自然と人が上手く融合したような街の造り。

「わー！！すごいすごい！」

有希がはしゃぐのも無理はない。

木と石が合わさったような素材のレンガが綺麗な茶色のグラデーシヨンになっており、その隙間隙間に半透明の色のレンガの様なものも積んである。

窓は波打つ模様のような少しにごったガラスになっていて、それがかえって風合いが良く見えて美しく感じる。

「ほう……これは」

銀じいが感嘆を漏らす。

「この街は俺が地球に居る間に精霊使いの街になっていたみたいじゃな」

「えっ？何で銀じいちゃん、そんな事分かるの？」

「この建物はどうやら精霊族の力に満ちておる、恐らくじゃがならんらかの方法で精霊の力を受け取りやすく設計されているようじゃな」

「銀郎、さすがだね。そう、ここ20年ほど前からここは精霊使いの町長が収めていて、追放された術師等が多く移り住むの」

「ルビィ、追放ってどういう事？」

「は、うん、術師や多種族などは人間にとって不思議な現象を起こすものだから、今はそういう事はあまり無いのだけど、昔は偏見みたいなのがあったりしたのよ」

どんな世界でも人間は欲望に忠実で愚かで悲しい生き物だ。

「とりあえず、暫く厄介になるかもしれないから宿を探しましょう」  
ルビィにそう言われ皆で街を歩いていく。



第五話 異世界へ（前編）（後書き）

やっと異世界のお話が前半掛けました。  
文章力が足りず、四苦八苦してます。

## 第五話 異世界へ（後半）

「あつた、ここね」

ルビイさんは街の案内マップの様な者を手にある一軒の建物を指さす。

俺達の希望通り小さなキッチン付きの部屋がある宿屋を調べてくれたらしい。

さすがに声には出さなかったが有希が小さく万歳をした。見られて恥ずかしそうに隠す。

皆で受け付けに向かいとりあえず一週間、男女部屋を分けて宿泊のチェックインを済ませるとそれぞれが部屋へと向かう。

有希は昼まで休憩しに、勇次は荷物を下ろすと銀じいと食材探しに行ってしまった。

俺はと言えば何もする事が無いのでルビイさんに付き添ってもらい武器の扱い方を教わっていた。

この異世界に来て何度も思ったのが武器の扱いにくさだ。戦いは前に試したとおりまったく問題は無いのだが、意識的に使えなければ強いとは言えないし、今までは動物だったから良かったものの対人となると意図的に戦おうとしない限り命の保障はないだろうな。

俺達は今まで剣道を地球でやっていて、普通の人よりはそれなりに出来るはずだったんだけどな……。

竹刀と真剣はまた別の様で、身体の運び方が難しかった。

-----

実は武器はそこら辺で買った武器とはまた違い、俺達の力によって出来ている。

元は守護石と呼ばれるもので色は乳白色をしている、地味な様で居て美しい。

この石はある種族から代々受け継がれている者で従者である銀朗では分らないみたいだ。

今俺達が持つているついでには俺達の母さん、父さん万が一の時の為に託されたのだそうだ。

この石には意思というものはまったくないが、守護人の血の契約を施す事で主と認識され命令に従うように出来た神具のようなものになる。

それぞれの特性に合った武器へと変化するらしく、有希は力を補うよう本人のみ羽のように軽いメイスの形状に、勇次は得意の和弓の形状に、そして俺は刀の形状だった。

正直、刀は苦手だと思っている。

どちらかという運動の延長戦であるナックルとかの方が使いやすいと思うんですけど……。

「ルビイさん、ちょっと見本で型を見せてくれよ」

型を見ないと練習のし様が無いと思いきり切ってルビイさんに聞いてみた。

ルビイさん刀って握った事あるのか？

お願いしておいてなんなんだが、戸惑う俺にルビイさんは予想外の反応を返してくれた。

「そうね、真剣は始めてだったわね」

「真剣なんて言葉良く知ってるね」

「それはね、零御様が良く言ってたから……懐かしいわ」

くすりと少し懐かしむ様に微笑む、最初は真面目な感じの印象だったけど、何日か野宿を皆で過ごして大分お互いに打ち解けてるみたいで少し嬉しくなった。

俺の武器は俺専用になってしまっているから、銀じいが持っている刀を少し借りて型をやってくれた。

穏やかに微笑んでいた顔が急に凜々しい顔つきになり、俺より少し長い刀を構え重身を中央に寄せ刃の向きを変える。

目の前の少し細根の木に向かって上から下へ斜めに切り裂く。枝の部分が崩れる。

更にそのとがった木に同じように上から下へ斜めに切り、その後上から下へ斜めに切る。

木に刀が触れる一瞬だけ刀がキンと鳴いた。

直ぐ後に手の柄の持ち方を少しずらしたまま持っていた腕を向きを変えるように広げそのまま脇差しへ戻す。

この一連の流れを俺にわかりやすいように少しゆっくりとやってくれた。

「この型は零御様に教えてもらったの、さっきのが基本の型だと言っていたわ」

「母さんに？」

「ええ、零御様も刀を使って守っていたのよ。昔から真剣という物を地球に住んでいた時にやっていると聞いたわ」

「へえ……」

自分も同じようにやって見ようと思い、先ほど見せてくれた型を思い直し目をつぶる。

重身を中央に、脇から刀を引き、刀の向きを変えた。

瞬間目を開き、刀を斜めに下ろした。

キンという刀の鳴き声と共に木の破片がずり落ちる。

「ええと……で、出来たのか？」

自問しつつルビィさんに向くとルビィさんは凄く驚いているようだった。

「……信也も真剣刀法を習ってたの？」

「あ、剣道は小さい頃からやっていて、真剣は始めてだけど……」

「そうなの……、だからなのね」

思わず首をかしげるとルビィさんが先ほど俺が切った木の切れた

ほうを持つてくる。

「この切り倒された部分を見て頂戴」

切り倒された切れ目の部分は半分だけすっぱりと切れてその後が  
ちぎれた様になっていた。

「刀に慣れていないとこの切れ目がちぎれた様になってしまうの」

あーやっぱり苦手だからか……そう思っ  
て落ち込んでいると、ル  
ビイさんは首を横にふった。

「違うのよ、本当にはじめてだっ  
たらすべての部分が殆ど千切れた  
ような切れ目になっているはずなのに、  
半分も綺麗に切れているの、  
その証拠に……ほら」

ルビイさんは自分の切った木を見せてくれた。

ルビイさんの切れ目も俺と同じように  
半分ほど切れて後はちぎれた  
様になっている。

「血の成せる技なのか……始めてで  
こんなに切れるのは相当勘がいい  
と思うわ。私これでも刀は10年ぐ  
らい教えてもらっていたのよ？  
信也は多分もつと練習すれば直ぐ私  
を追い越すと思う」

物凄く褒められてこそばゆかつた  
けど、心地よいつと感じた。

「分かった、弟と妹を守る為にも  
もう少し鍛えて見るよ」

「ええ、頼りにしてる！」

ルビイさんが花が開いたように笑う。

綺麗だと思つた、自然と俺の顔も  
綻ぶ。

この異世界に巻き込まれてしまつた  
俺達の現状はあまりよくは無  
いが、それでも新しい出会いに感  
謝したい。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

その後、食材を調達しに行つてい  
る勇次にこの場面をこっそり目  
撃されていたようで、夕飯時に散  
々からかわれたが、長男の威厳で  
黙らせたので大丈夫だ。

ここの食材は色はまったく違えど  
も味は地球と似てるものが多い。

明日はお金稼ぎに行くために旅人の為の資金安定所という場所があるよつでそこに行こうと思っっている。  
明日も忙しくなりそうだ。

第五話 異世界へ（後半）（後書き）

如何でしたでしょうか。

刀の扱いの所は動画などを見ながら一生懸命不自然な動きが無いようにこだわって打ったつもりです。

不自然な部分があればご指摘お願いします。

次回も読んでいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5843w/>

---

守護人たちへ

2011年9月27日13時36分発行